

博士学位請求論文審査報告

2023年2月8日

申請者：大野絢也（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程、SD151003）

論文題目：近代華中・華南における鉄道建設と交通網の再編

論文審査委員

佐藤仁史

加藤圭木

千葉正史（東洋大学）

1 本論文の概要

本論文は、南京国民政府期および日中戦争期の華中・華南における鉄道の整備過程と沿線交通網の変容について、武漢と広州を結ぶ粵漢鉄道を中心として分厚い実証を施しつつ、交通史研究の新たな方向性を予感させる問題提起をした意欲作である。従来の鉄道史研究では、清末の鉄道利権回収運動や清末民初の鉄道借款、「満洲」や華北を中心とする個別の鉄道路線などに研究が集中してきた。これに対して本論文は、南京国民政府期の経済建設や日中戦争の帰趨において決定的な重要性を有したものの、十分な分析が行われてこなかった粵漢鉄道の建設・運営が多方面においてもたらした影響を丁寧に分析した点に大きな独創性が見られる。様々な新聞・雑誌、鉄道関係出版物、檔案、外交文書などを縦横に用いた分厚い実証が特徴であり、特に新聞・雑誌記事の博搜からは幾つかの新事実が発見されている。序章と終章を除くと全6章からなり、前半3章からなる第1部「南京国民政府期の経済建設と交通網の再編」では南京国民政府期の経済建設が交通網再編にもたらした影響について、後半3章からなる第2部「戦時下における交通網再編」では日中戦争期において日中両国が鉄道路線をどのように争奪したのかが分析されている。

2 本論文の成果と問題点

本論文の第1の成果は、粵漢鉄道の伸張・整備という具体的な問題の追跡を通じて、南京国民政府の経済建設が有した特徴を多面的に検討した点である。近年の南京国民政府研究においては、南京国民政府が中国統一や強い国民国家を建設するために推進した種々の政策の意義を再評価する方向性が顕著であった。鉄道建設もこうした側面から捉えられてきたが、本論文で明らかにされたのは、西南派を初めとする地方勢力との主導権争いの中で進める必要があったこと、様々な地域の利害に対しても細心の配慮を行いながら進める必要

があったことという諸史実である。また、こうした複雑な過程の中で進められた経済建設の精度や計画が日本軍侵攻に備えた軍事動員を考慮する必要の中で変更を迫られ、それが拙速な建設推進、事故の多発に繋がったことも併せて明らかにされている。

本論文の第2の成果は、粵漢鉄道と広九鉄道の接続問題を扱った第3章に示されているように、鉄道敷設をめぐる地域間対立の実態を明らかにした点である。この点は本論文の白眉とも言え、極めてインパクトのある貢献となっている。従来の近代中国史研究では、中央と地方、国家と社会との関係はややもすれば二元的な理解がなされがちであったが、本論文では、鉄道接続に反対する広州商人層と接続を支持した香港華人商人層との対立の背景にある地域利害の実態に光が当てられている。また、単なる地域利害の対立というファクトファインディングに止まらず、香港華人商人層の背景にあった英国の意向や、英国からの鉄道借款のためイギリスの意向を大局では受け入れつつも、広州商人層の「世論」にも配慮せざるをえなかった中央政府の動向も活写されている。このような地域対立が、中央地方関係や国際関係とも複雑に絡み合っ展開されていたことが明らかにされている。

本論文の第3の成果は、日中戦争期における交通網の変容を、日中両国のそれぞれの視点から追跡している点である。日本軍の華中侵攻に伴って、国民政府は武漢を経て重慶へと移転し、戦線は武漢近辺において膠着することとなったのは周知の事実である。かような戦況において、華中・華南を南北に連結する粵漢鉄道が日中双方の争奪の対象となったが、その具体的な過程については十分な分析が積み重ねられたとは言い難い状況にあった。本論文は研究上の空白を埋めるという点で大きな貢献である。

本論文の第4の成果は、一次史料、とりわけいわゆる「地方文献」を博捜することによって様々な史実を掘り起こした点である。中国近現代史研究においては、最も基本史料である雑誌・新聞は、近年ではデジタルデータベースの登場によって利用は容易になった。しかしながら、少なからぬ地方新聞や雑誌は依然としてデジタル化されておらず、中国、台湾、香港の各所蔵機関に赴いて頁を繰る地道な作業が必要である。本論文では、『香港華字日報』をはじめとするローカル紙や鉄道部の関連部門が刊行した各種の出版物を丁寧に収集・分析することで説得力の高い実証が行われている。

以上の4点に見られるように本論文では学界において少なからぬ寄与をし得る分析がなされているが、残された課題もある。以下、4点を挙げておく。

第1の問題点は、粵漢鉄道が敷設された背景と意図とを清末以来の長期的な時間軸の中に位置づける必要性である。清末における鉄道政策では、全国を繋ぐ4大幹線を整備し、南北東西に大臣を派遣して有事の際に迅速に対応することが想定されていた。武漢において京漢鉄道と接続して北京と広州を結ぶべく計画された粵漢鉄道も、南方への大幹線を構成するものとして位置付けられていた。したがって、かような背景を踏まえた上で、国家による政治統合が鉄道を媒介としてどのように広がっていったのかを捉える必要がある。かような視座を据えることによって、第1部で取り上げられた華南における軍閥政権の自立化と南京国民政府による解体の背景もより深い読みが可能になると思われる。

第2の問題点は、「沿線地域社会」や「地域社会」をどのように捉えるのかという点である。本論文の各処において地域社会や沿線地域社会というタームが用いられており、政策が実行される現場の住民達が政策をどのように捉え、どのように対応しようとしたのかに切り込んでいこうとする意図は第3章に端的に表れている。しかしながら、地域住民についての踏み込んだ分析は広州や香港の商會を主導した有力者に限定されており、その他の地域指導層レベルの動向は明らかにされていない。また、民衆レベルの反応についての目配りも必要であった。特に鉄道敷設に現場において建設に従事する労働者がどのように召集され、どのように処遇されたのかは重要な分析課題であると思われる。

第3の問題点は、本論文の対象地域や時期の絞り込みについてである。本論文の題目は華中・華南と冠してはいるものの、第6章をのぞくと、分析対象は粵漢鉄道およびその周辺にあった各種の交通網である。しかしながら、第6章の対象となっているのは長江下流域であり、大雑把な地域概念では華中に属するものの、粵漢鉄道沿線地域とは、政治・経済上での位置づけは大きく異なる。また、時期についていえば、粵漢鉄道の日中による争奪が結果としてどのような結末を迎えたのかが第2部で扱われてない。日中戦争の最末期には日本軍によって一号作戦（大陸打通作戦）が実施されたことは有名な史実であるので、この動向との関連で粵漢鉄道の争奪が最終的にどのような結末を迎えたのかを分析することは不可欠な作業であろう。

第4の問題点は使用する一次史料である。本論文の内容に関連する一次史料には、広東省檔案館や広州市檔案館に所蔵される地方檔案、台湾の国史館や中央研究院近代史研究所檔案館に所蔵される外交檔案などがある。特に地域社会の分析を深化させるには地方檔案の利用は不可欠である。また、中英関係についても、これらの檔案群やF0の如き外交文書の更なる検討が必要であろう。ただし、これらは2020年春以降、海外での史料調査が行えなくなってしまったことが要因であり、執筆者も十分に自覚していることを附言しておきたい。

3 最終試験の結果の要旨

2023年1月20日、学位請求論文提出者大野絢也氏の論文についての最終試験を行なった。本試験において、審査委員が、提出論文「近代華中・華南における鉄道建設と交通網の変容」に関する疑問点について逐一説明を求めたのに対し、氏はいずれも十分な説明を与えた。

よって、審査委員一同は、大野絢也氏が一橋大学学位規則第5条第1項の規定により一橋大学博士（社会学）の学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有するものと認定した。